TDA News Letter　Vol.60

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構　Town Design Aid, Japan　http://www.tda-j.or.jp

2023-09-01

日韓都市デザイン交流会2023の討論会終了後の集合写真（於　議政府市・信韓大学）

日韓都市デザイン交流会 10 周年と今後の課題

2014年、日本の都市デザイン専門家達のソウル訪問がきっかけとなって始まった日韓都市デザイン交流会は今年で10周年になった。最初は軽い出会いで始まった交流会は時間が重なるとともに、参加者が増え、両国の都市デザインに関する紹介や勉強、討論をしながら発展を話し合う集いになり始めた。この10年が短いと言えば短い時間だが、両国の政治的な問題やコロナ感染症の問題など様々な困難の時間も多かった。2019年は日韓の政治情勢が深刻な状況の中、韓国側の参加者が交流会に参加するため密かに日本に入国したこともあった。その交流会は、以前より意味深い話をすることができたと思われる。

10周年目の記念交流会となる今年は、韓国仁川（インチョン）市と議政府（ウィジョンブ）市で開催し、両自治体の都市デザインの問題に対して、両国の専門家達が発表と議論を重ね具体的な提案をするレベルまで発展した。それは2014年から様々な混乱を超えて蓄積された日韓都市デザイン交流会の経験がなければ得られない成果だと思われる。その間、私も含め両国の専門家たちは少し歳を重ねたが、都市デザインに関する情熱は2014年と同じであり、同じ志しの専門家達はさらに増えている。中国や他のアジアなどの専門家達との交流に拡大したい願いもあるが、このようなよい集いを継続することが何より大事なことだと思われる。次の世代のため、この交流会の役割を担う新たなメンバーの参加や出版などを通じた10回の交流会の歴史の整理、両国の都市デザインに対して共同のデザインをするきっかけ作るなど、より実践的な交流会としていくことが今後の課題だと思われる。また、日韓都市デザイン賞を作り、都市デザインの発展に貢献した個人と団体に対し権威ある賞を贈ることも必要だと思われる。これからの日韓都市デザイン交流会の歩みをより期待している。

韓国・中央大学校教授　李 錫賢

目次

P1
■巻頭
日韓都市デザイン交流会10周年と今後の課題　／李 錫賢
P2
■TDA NEWS 1
第3回WEBセミナー「都市景観・エリアマネージメント・デジタルサイネージ」開催報告　／中野 竜
P3～5
■TDA NEWS 2
日韓都市デザイン交流会2023開催報告
／高谷 時彦・高 殷禎・李 錫賢
P6
■「生物多様性」を通して都市と生活が見えてくる　その７　／並河 みき
■景観故記
No.6　ニッポンの団地 ／曽根 幸一
P8
■身近な景観を作る
第８回　七尾の暖簾：女将さん達が発案した花嫁のれんの展示
／武山 良三
■ホワイトボード

TDA NEWS 1

第3回WEBセミナー 都市景観・エリアマネージメント・デジタルサイネージ 開催報告

ランディクト／TDA正会員　中野 竜

TDAでは、2023年3月25日に第3回景観デザイン支援機構　連続WEBセミナーを開催した。

今回は、街の景観に大きな影響を与える存在になりつつある「デジタルサイネージ」にスポットをあて、その活用事例と景観上の課題について、3人の識者とともに考えた。

近年のディスプレイ技術の進化や高速ネットワークの普及に伴い、電子的な表示機器を用いた「デジタルサイネージ」（以下、DS）がまちなかに広がりを見せている。DSは、商業広告やサインインフォメーション、空間演出などでにぎわいを創出する一方、その光や音によってまちの景観に与える影響や課題が指摘されている。

本セミナーでは、3人の識者をお招きし、活用事例を参照しつつ、DSの効用と景観上の課題について議論が行われた。

プレゼンテーション

最初の発表者は、日建設計　福田太郎氏である。福田氏は、駅まち一体開発プロジェクトの開発コンサルティングなどを手掛け、最近では、渋谷駅前エリアマネジメント協議会と連携し、渋谷スクランブルスクエアの外壁面に約800㎡の大型DSを設置した実績を持つことから、主に渋谷のエリアマネジメントとDSの関係性について発表があった。

次の発表者は、慶應義塾大学　小林博人教授である。小林教授は、建築や土木構造物など都市を構成するハードな空間構成要素からソフトなコミュニティの人間関係まで、都市のありようにかかわる環境デザインの観点から、DSについて語っていただいた。

小林教授は、2006年から銀座デザイン協議会にアドバイザーとして参画し、銀座の景観とまちづくりに深くかかわってきた経験から、銀座まちづくりにおける合意形成と景観、その中にどのようにDSを実装していくかについて発表していただいた。

最後の発表者は、富山大学理事・副学長武山良三教授である。武山教授は、大学でサインデザイン、情報デザイン、景観デザインの研究を通して、屋外広告物を活用した地域活性化について調査・研究を行うかたわら、サインデザイン専門誌『signs』編集長を務めるなど、DSの在り方に造詣が深い。

屋外広告物のデザインに長年かかわってきた経験から、景観要素としてのDSのデザインについて語っていただいた。

トークセッション

トークセッションでは、参加者からの質問や意見に対し、各氏がコメントをした。

紙面の都合上、すべての意見は掲載できないが、多くの人が感じている「DSの持つ明るさや音量が街の雰囲気にそぐわない。聞きたくない音や見たくないものを屋外に持ち出すことをどうとらえればよいのか？」という質問に対し福田氏は「一般的な建物に対するDSの規制ルールは現在はあまり厳しくない。渋谷では、一応、音に関する自主規制があるが、問題は強制力に欠ける点である。映像と音が一緒にある方が、広告としての価値が高くなり、より高い売上を見込めるという意見もある」とルールやDSの評価が定まっておらず、DSの持つ課題感が行政、事業者、利用者で異なる現状を指摘した。

小林氏は「建築やDSの技術が高まり、安価で解像度の高い映像を屋外に出せるようになった。この流れは止められない。銀座では、地域の協定に基づき、個別に協議や説得をしているが、理解を得られない事業者も存在する現状もある。協議型のまちづくりにおいては、協議に参加してくれない事業者との対話が課題となる」「コロナ後、人の流れや商売の仕方が変わり、事業者としては広告媒体に頼りたい気持ちが強くなってきた。そのことがディスプレイのデジタル化に拍車をかけている」と、まちづくりにおいては法的規制だけに頼るのではなく、地元の理解を得ながら誰もが快適なまちづくりをするルールづくりや協定作りの必要性を強調しながらも、DSの広告的商業的価値も認め、経済活動を促進していかなければならない難しさがあると話した。

武山氏は、デジタルでしか表現できない価値やコンテンツをしっかり作ったうえで、それをまちに持ちだすことが大切だと語った。

「人間の目ではリンゴを100万倍に拡大することはできないけれど、デジタルにはできますね。

広告業者がおまけで作ったコンテンツではなく、デジタルでしか見ることができない映像を、デザイン料をもらってつくるデザイナー、そういう人材への投資をよしとするような世界をつくっていく必要がある」として、そぐわない広告を排除し、良質なコンテンツを創り出せるようになることを目指すべきと語った。

セミナーでは、DSがまちに与える経済効果や賑わいといったプラスの影響と、景観に与えるマイナスの影響の双方について、参加者からさまざまな質問や意見が出された。終了時刻を大幅に上回るほどの熱い議論が交わされた本セミナーは、まち全体がこの新技術をどう扱うべきか模索している証でもある。3D表現など、新たな技術によって当たり前の風景になりつつあるDSについて、今後も活発な議論を期待したい。

TDA NEWS 2

日韓都市デザイン交流会 2023 開催報告

毎年10月に開催していた本交流会は、今年は６月１日、２日に、韓国の仁川（インチョン）市、議政府（ウィジョンブ）市を視察地として開催された。今回は、それぞれ現地を視察した後、両日ともシンポジウムを開催し、韓国、日本の双方の専門家による事例発表、両市の都市デザインの課題に対してディスカッションを行うというハードスケジュールであったが、日韓の専門家との交流が深まり、とても有意義な２日間であった。（日本語訳：オム・ジヨン）

日韓都市デザイン交流フォーラムに参加して

建築／都市デザイン　高谷 時彦

■都市デザインで先を行く韓国

交流会では、自治体の都市デザイン部局の方々や、公的な「地域建築家」として活動している方々から、専門職としての都市デザインに対するこだわりと自信、誇りを感じ取りました。

実現された公共空間も素晴らしいと思いました。何でこんなに無駄に（すいません！）車道が広いのだろうと思っていた光化門前も今回訪れると歩道が広場状に拡幅され、市民の楽しい活動の場になっていました。また日本では活躍の場がなかったザハの東大門デザインセンター（写真１）も都市デザインの成果としてみれば素晴らしいものだと思います。自由に伸びあがり躍動する建築と、じっと動かない地下遺跡を対比的、相補的に扱うことで、時と空間が交錯する新しいタウンスケープ、人々がこれまで体験することのなかった都市的空間の物語をつくることに成功しています。ソウル都市圏の都市デザインは日本よりもかなり先にあるようです。

■違いを知ることの楽しみ

進んだ都市デザインを学ぶことに加え都市デザイン交流には別の意義もあります。それは都市空間の質やその背景にある文化の違いを知り、味わうということです。

恥ずかしい話ですが、韓国の大都市では多くの人が高層あるいは超高層住宅に住んでいることを初めて知りました。仁川のソンド地区を遠望したとき「丸の内マンハッタン計画」を思い出しました。日本では『実現しなかった未来』ですが、韓国では、今そこにある現在です。私も含めジェイコブス的な感覚を持つ日本の専門家から見ると、高層居住の様々な課題が思い浮かびます。しかし、単なる投機の結果ではなく、公共交通と徒歩で暮らすコンパクトなまちづくり政策と一体のものとして高層住宅が選択されたのだと思います。また都市づくりを具体的に市民と考えていこうという姿勢は、フォーラム会場（都市センター）においてあった都市模型を見ると伝わってきます（写真２）。日本といえば、都市政策（のお題目）と、実際の住宅地開発が連動せず、駅から離れて造成された広大な戸建て住宅地が太陽光パネルで覆われているというのが大都市圏の現実です。どちらがいいかということではありませんが、都市政策の一環として超高層を選択した韓国の今後に注目をしたいと思います。

同じ仁川の開港場地区では歴史街区の再生活用が徹底されていました。日本人から見ると少し不思議な「日本人町」でしたが、「韓国の大工さんがつくるとこうなります」という説明には頷いてしまいました。

私には、背景に壁／軸（柱、梁）の建築文化の違いがあるように思えます。建築が並び集合的に一つの壁をつくるのが大陸の文化。日本の場合はもう少し一つ一つの家が独立し、集合の仕方にも独特（適当な？）の間合いがあります。韓国の建築家や大工さんが日本租界のまちを「再現」する中でその文化的な差異が浮かび上がっていることには興味を惹かれました。

■今後の交流に向けて－地方都市

「都市デザインの違い、文化の違い」に巡り合うためには分かり易く地域性が残っている地方都市との交流も面白いのではないでしょうか。

私は自分が長く都市デザイン活動でかかわっていた山形県鶴岡市や酒田市のような小さなまちで、市民の方々と交流してもらえないものかと期待します。例えば羽黒に今なお生きている修験道の山伏集落を体験してもらいたいものです。集落（人工）と山（自然）、あるいは生と死後の世界を時空を超えて自在に行き来する山伏たちと、時間と空間の織りなす作品である都市デザインについて話をするのも面白いのではないでしょうか。酒蔵のまち、大山で地域に誇りをもって生きる人たちと、酒を酌み交わしながらのまちづくり議論も楽しみです。地域の専門家や行政職員、市長さんなどにも加わってもらい、都市デザインを巡って忌憚ない意見交換ができることを願っています。

写真１　東大門デザインセンター

■勝手に希望すること、あれこれ

議政府駅の東西をどうつなげていくのかなどの具体的なプロジェクトを巡る議論を深めることにも興味を惹かれました。日韓の文化の違いを知る上でも面白い体験の場となるに違いありません。

また、都市デザイン交流を東アジアにおける文化交流としてとらえると、中国の人が参加してくれるとさらに面白くなるとは誰しも思うところでしょう。しかし、準備など大変大きなハードルがあるのだと思います。

私の勝手な希望はここで終わりにしたいと思います。日韓の間だけでも国際的な会を継続するためには大変なご苦労があると思います。刺激に満ちた楽しい場を用意してくださった日韓両国の方々に心よりお礼申し上げます。

写真２　都市模型

インチョン市の都市デザイン政策

仁川広域市都市デザイン課長　高 殷禎

韓半島の中心

仁川（インチョン）は韓半島の中央にある。面積は1,067km²だが、ソウルの1.7倍、東京の半分ぐらいである。1981年広域市に昇格した当時、面積は201.21km²だけだったが、近隣地域を編入して、共有水面を埋め立てなどで2022年には5倍を越える面積となった。

人口は約300万人で、ソウル、釜山（プサン）に続いて3番目である。韓国も全国的に人口減少が大きな社会問題となっているが仁川は、広域市（人口100万人以上の市）の中でも唯一人口が増えている都市だ。韓国は、首都圏であるソウル特別市、京畿道、仁川広域市だけで大韓民国人口の約半分程度が住んでいる。

All ways Incheon（すべての道は仁川に通じる）

仁川は『all ways Incheon』という都市のスローガンを持っている。すべての道は仁川に通じるという意味が込められている。陸地の道（全国に繋がる便利な道路）、海の道（海に面していて港がある）、空の道（仁川国際空港がある）など全ての道が仁川から始まるという地理的な理由もあるが、韓国中につながる道を持ちながらも、世界にも繋がるという意味が込められている。仁川に国際空港があり、韓国にくる大半の外国人はICNと書かれた航空券を手にしているので仁川という地名を知らない人はあまりいないことが大きな特徴だと思う。

仁川は空港と港、経済自由区域（松島、永宗島、青羅を結んでる区域）、アジアのハブ、韓国の首都圏の都市として知られている。しかし、より重要な仁川のアイデンティティとは「最初の〇〇」というのが多い都市ということだ。ジャージャー麺、近代公園、公立学校、クラブ、灯台やサイダー、サッカー、野球、劇場、移民、鉄道、高速道路などが仁川から始まっている。もう一つのアイデンティティは国を救った都市であること。歴史的にも多くの戦争や侵略が仁川の海で起き、特に朝鮮動乱のときには仁川上陸作戦が成功しなかったなら、今の大韓民国はなかった。だからFirst ever、つまり韓国でも最初という話こそ、仁川を象徴するアイデンティティである。

仁川の夢、大韓民国の未来

行政のデザインは市政哲学とも脈絡を維持しなければならない。現在のユ・ジョンボク市長のビジョンは「仁川の夢、大韓民国の未来」である。市長の最も重要な公約は、済物浦（チェムルポ）ルネサンスだ。済物浦（チェムルポ）は仁川の昔の地名である。以前の仁川は今よりもさらに小さな面積で、仁川内港周辺の旧市街地を指す。大韓民国の近代化を導いたところだが、今は低迷した旧市街地の姿である。過去の済物浦（チェムルポ）が再び復興し、文化、観光、産業が融合する人中心の地域を実現することが今の仁川市の大きな目標である。

仁川の都市景観

仁川は都市デザインとしても「最初」が多い都市である。私が所属する仁川市役所都市デザイン課の中には「公共デザインチーム」、「都市景観チーム」、「公共建築チーム」と三つのチームがあり業務が細分化されている。2003年、韓国に「景観法」がない時から景観審議会を始めていたり、2017年にできた 「公共デザイン振興法」がない時にも都市デザインの基本計画を立てていた。

仁川の景観行政は相反な魅力が共存する都市、仁川の景観を未来遺産に一緒に夢見ているという目標を持っている。1.森林自然と都市のスカイラインが調和された景観、2.韓国を代表する国際港湾と美しい自然海岸が共存する景観、3.韓国初、仁川で最高の文化と市民が一緒に愛着を持って作る景観、4.新都心と旧都心が調和しながら作る特色ある地域景観、5.市民と行政、広域市と各区が疎通して協力する景観、の5つの推進目標としている。この中でも韓国初、仁川で最高100の文化資源とともに仁川の市民が最も愛する50の文化景観を選定したものと、5年ごとに都市景観を記録化する事業などは注目されてる景観行政だ。

仁川の公共デザイン

仁川は都市規模が急速に成長し、地域格差などネガティブな都市のイメージがあるのも事実である。仁川の公共デザインはより良い未来のために、未来に対応するデザインという目標を持っている。これまで犯罪予防環境設計、旧都心の都市デザイン活性化事業、色彩デザイン事業、夜間照明デザイン事業、標準デザインガイドライン事業などを進めてきた。各事業別に都市の精密な調査と分析を土台に、総合的な計画やガイドラインを作って各区と公共機関が拡大適用するプロセスを持っている。

仁川の公共デザイン政策は人中心の都市、スマートデザイン都市、幸せで安全な都市、創造文化都市、国際環境都市という5つの戦略がある。関連した事業を一つ紹介すると、歩きたい都市のために最近H-ZONEを推進している。H-ZONEはHOSPITAL ZONEの略で、病床数300個以上の大型病院を基準に周辺500m以内の区間をH-ZONEに指定して歩行弱者たちが安全に歩ける環境を助成している。

この制度により、応急患者のための応急専用道路、歩行者の安全空間の確保、案内サイン、スマートインフラなどが整備された。

仁川の公共建築

我々が考える都市デザインの重要な軸として公共建築がある。よい建築は市民の生活を変化させるという確信があり、そのために、良いデザインに向けた企画の重要性を認知して、これを後押しするシステムを構築することに行政として力を入れている。民間専門家の中で総括建築家と公共建築家を委嘱して企画段階から公共建築の品質を向上させる努力をしており、これまで、「仁川ミュージアムパーク」や「仁川市黔丹博物館&図書館複合文化施設」の国際デザインコンペには、世界的に有名な建築家たちが参加する成果が得られた。

DESIGN AS CULTURE

現在、我々仁川市都市デザイン課としては2025年アジア建築士大会(21st Asian

仁川から始まる 100 の物語

仁川開港場文化財夜行

仁川ミュージアムパーク国際デザインコンペ受賞作品

黔丹博物館＆図書館複合施設文化施設国際デザインコンペ受賞作品

Congress of Architects 2025)の誘致とユネスコ創意都市(2025 UNESCO Creative Cities Network_DESIGN)の選定にも注力しながら仁川の都市デザインを広報することにも力を入れている。

最後に

デンマークデザインセンターで発表した「デザインはしご」というのがある。皆さんの都市はどの段階にありますか。都市デザインがスタイリングだけではなく、都市の戦略としての形のデザインを超えて、デザイン思考を考慮することが当たり前の'文化'になる日まで共に努力しましょう。国籍と理念を超えて交流する我々が両国の都市デザインの発展に小さいけれど大きな響きがなることを祈願します。また、お目にかかれることを楽しみにしています。

歩きたい魅力的な都市、議政府（ウィジョンブ）市の都市デザインの課題

韓国・中央大学校教授　李 錫賢

議政府市は韓国京畿道北部の拠点都市として人口約48万人の都市だ。9ヵ所の米軍基地がある軍事都市でもあり、歴史的にも朝鮮時代の歴史と文化の中心的役割を果たしたソウルの代表的な衛星都市でもある。そのような地理的、歴史的重要性を持つ都市だが、議政府市は近代化の過程で過度な開発制限区域の設定と乱開発により都心の景観と文化的資源はほとんど見当たらない状況であった。その結果、歩行と公共空間の利用性は非常に劣悪な都市になっている。

2022年今のキム·ドングン市長が就任するとともに市長は歩きたい都市づくりを議政府市デザインの核心的な目標として設定し、魅力的な都市づくりと誰もが不便なく歩ける都市づくりを本格的に推進することになった。議政府市は韓国国内でも歩行環境が悪いところだと評価されており、これは都市イメージと生活環境低下の重要な要因になっていたので積極的な改善が求められていた。

まず重要な課題としては、歩行ネットワークを構築し、ユニバーサルデザインなどの公共デザインの改善により都市中心軸を快適に歩ける都市づくりを本格的に開始した。実際、このような試みは韓国でもソウルを中心に広範囲に推進されていたが、都市政策の核心を「歩きたい都市づくり」とし、統合的な都市デザインを適用した事例は非常に少なかった。その点で議政府市の都市デザインの新しい試みは韓国でも重要な意味を持っている。そのため、副市長直属で都市デザインチームを作り、すべての都市政策事業で歩きたい都市づくりを中心に組織を再編し、政策方向を調整した。

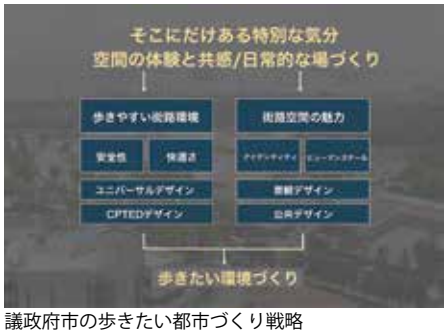
また、これを積極的に行政として推進するために25個の「ワーキンググループ」を各案件ごとに組織し、行政と市民が中心となって問題を解決する方式で活動を展開した。これは既存のトップダウン方式の行政中心政策とは異なり、市民の視点で問題を見つめ改善方案を導き出して持続可能な都市づくりを推進するという観点からその意味が非常に大きかった。最初はワーキンググループの参加に慣れない各部署の担当職員と市民も今は自然と討論に参加し、デザインにも自由に意見を提示ようになっている。

何よりも参加主体の観点を改善し、自らが歩きたい都市づくりに参加するためには、新しい試みに対する事例を探していくことも重要だった。これに対し議政府市では市長と副市長が中心となって日本の横浜と東京世田谷区を踏査する共に韓国国内の大邱と群山、水原などの重要な先進事例に対する見学や調査も行った。最近は市民を中心とした先進事例の見学も積極的に推進し、全体的なデザイン意識の向上も図るようになった。特に議政府市の景観と歩行で最も重要な拠点である議政府駅周辺の空間改善のために推進した国内外事例踏査と討論は最近、その結実が少しずつデザイン成果として現れている。

同時に物理的な都市環境の改善とともに文化的基盤を持つ都市づくりも議政府市の歩きたい都市づくりの重要な課題である。議政府市はこのため、米軍基地が残っていた敷地に対して、従来の建築物と環境を生かしながら文化空間を造成する事業も積極的に推進している。その一つとして米くんから返還されたキャンプレッドクラウドでは25万坪の敷地に多様な芸術文化空間を作り、市民の文化活動と芸術の拠点として成長させるため、国際的な討論と市民参加活動を積極的に推進している。今回の日韓都市デザイン専門家交流会を通じて、日本TDAと韓国より良い都市デザインフォーラムが参加した米軍基地の跡地見学と討論は、そのようなデザイン方向の設定に非常に重要な役割を果たすことになった。

今の市長になって約1年程度の都市戦略活動を通じて議政府市は歩きたい都市づくりの土台を作ってきており、これは今後市民に歩きながら地域の魅力を感じられる都市成長に意味ある一歩を踏み出したという点は明らかだ。しかし、今後このような成果が現れるまでは、より広範囲な専門家の参加と行政の持続的な政策推進、市民との共感と拡散が要求されている。そのような課題に日韓都市デザイン専門家交流会の積極的な参加は重要な意味を持つようになり、韓国と日本の都市デザイン専門家団体が持つ経験と関心が議政府市のデザイン活性化に大きく寄与することを期待する。

来年からさらに成長した「歩きたい都市議政府市」となり、皆様とその成果についてもう一度議論し、私たちの課題を発掘していく時間を持つことができることを心より願う。



議政府市の歩きたい都市づくり戦略

議政府市長（左から３番目）と担当職員の横浜市都市デザイン見学／歩きたい都市モデルに対する見方を高めるきっかけとなった

日韓都市デザイン専門家交流会の議政府駅周辺見学／地域都市デザインの課題を多様な観点から見て解決策を模索する場となった

「生物多様性」を通して都市と生活が見えてくる　その7

旧タイトル：「生物多様性」を通してヨーロッパの都市と生活が見えてくる

登録ランドスケープアーキテクト(JLAU,AILA)／TDA正会員　並河 みき

連載のさいごに

EUの生物多様性ブックレットの翻訳をきっかけに、その中で紹介されているトピックを54号より6回に分けて取り上げてきた。それぞれの号では、このブックレットが発刊されたヨーロッパの事例のみでなく、日本で身近にある事柄をとりあげたり、私自身が関わっているプロジェクトの事例を紹介したりして、より内容が伝わりやすくなるよう努めたが、どう読まれただろうか。

今回を含め7回、継続して書かせていただくなかで、私個人として気付いたことは、生物多様性という広範な分野に一人の生活者としてどのように関わることができるかという問いに対する、かすかな答えだ。それは、生物多様性の保全につながる小さな対応策が私たちの身のまわりに多くあり、それらを少しずつ理解すれば、日々の生活のなかでどんどん実践できるということである。例えばスーパーで商品を買うときに、少しでも生物多様性の保全につながる商品を選べたら、蓄えてきた知識が一定の成果を生んだと言えるだろう。

生物多様性ブックレットのアジア版を

ところで、このEU版に対するアジア版をつくっていきたいというのが、この記事を書きはじめた、そもそものきっかけだった。生物多様性は、それぞれの地域に住む人々がその土地固有の自然環境を理解した上で、時間をかけて育んできた生活文化により、保全、促進されてきたから、日本を含むアジア地域ならではの生物多様性保全の知恵を収集し共有していくことは重要だと思う。編集委員会でも、こうした問題意識を持って、少しずつ情報を集めて紹介する方向で議論を進めている。そうしたなかで、編集相談役の井上氏が学生時代に受けたゼミの資料を当時の学友より入手し、編集委員会で話題として提供されたので、この素晴らしい資料をここで共有したい。

The Rice Cycle

それは「The Rice Cycle」(1974)という、1973年10月に京都で開かれたICSID国際インダストリアルデザイン団体協議会総会とデザイン会議のためにJETROにより編集・発行された英文の小冊子だ。これには、「米」という日本人の主食である穀物が、そのあらゆる部位を余すことなく様々なかたちで利用・消費され、深く日本文化の中に位置づけられてきたことが記録されている。例えば米粒から餅がつくられ、酒となり、糊ができるだけでなく、藁は神社仏閣のお飾りや梱包の材料となり、また、それを燃やした灰は焼き物の釉薬となるなど、日本では米をめぐる深く成熟した循環経済がかたちづくられていた。そこでは、米が「もの」であるのみでなく、社会のなかに「様式」をもたらし、日本固有の生活文化として昇華されていったことは今もって驚きである。

これが発行された1970年代に、生物多様性という言葉は社会に広まっていなかったと想像されるが、この米の完全な循環形態は生物多様性の保全に大いに貢献したはずだ。

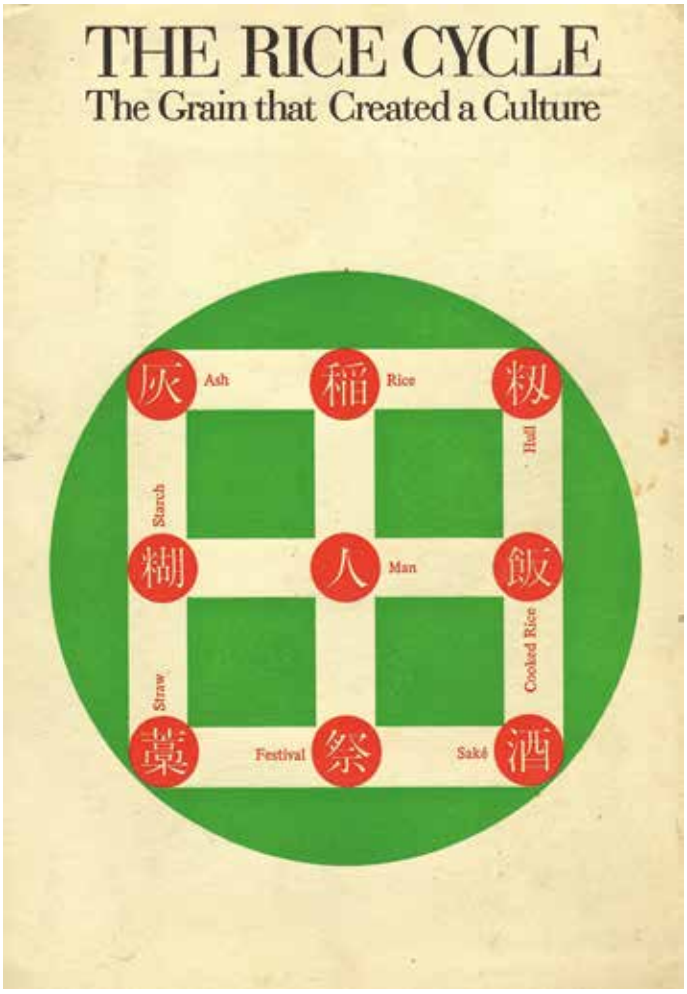
生物多様性と生活文化

過去にこのような循環経済を築いてきた日本人だが、近年はその循環は崩壊し、それにまつわる生活文化も失われている。生物多様性喪失の危機に直面した今、私たちは新たな保全のかたちを見出し、それを文化として昇華するまでに到達できるだろうか。ここで改めて過去を振り返り、アジア地域に根付いた生活様式を共有することで、生物多様性保全への道筋を少しでも照らしたい。

最後に、この小冊子の中で最も印象的なくだりを引用して終わりとしたい。

『「ライスサイクル」は、その物質とエネルギー循環のプロセスのみでなく、日本の文化を創り出し積み重ねるプロセスだった。日本の文化は広い意味でライスサイクルを中心にかたち作られていったと言える。ライスサイクルは環境保護として有効なだけでなく、日本人とその文化を少しでも理解するための、一つの入口なのだ。』（翻訳：並河みき）

※TDAホームページで当ブックレット翻訳パネルを公開中ですので、合わせてご覧ください。
https://note.com/tda_spinoff
QRコードからアクセスできます。



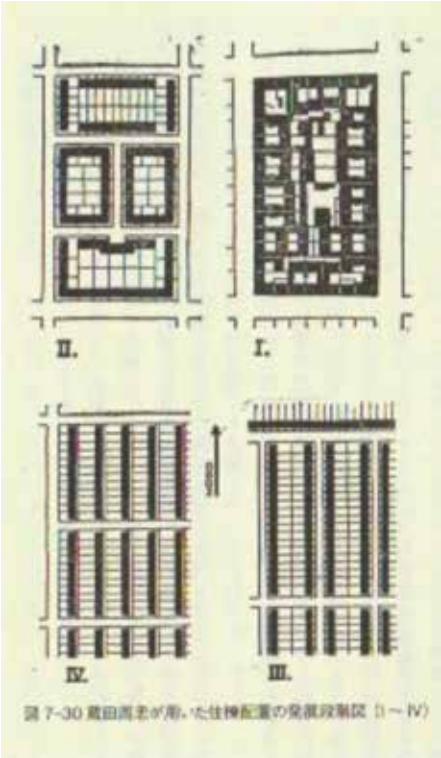
「The Rice Cycle」 編：瀬底恒　文：吉田光邦、伊藤ていじ　AD：田中一光　デザイン：太田徹也　出版社：JETRO 日本貿易振興会　刊行年：1974

景観故記

No.6「ニッポンの団地」

芝浦工業大学名誉教授／TDA 名誉会員　曽根 幸一

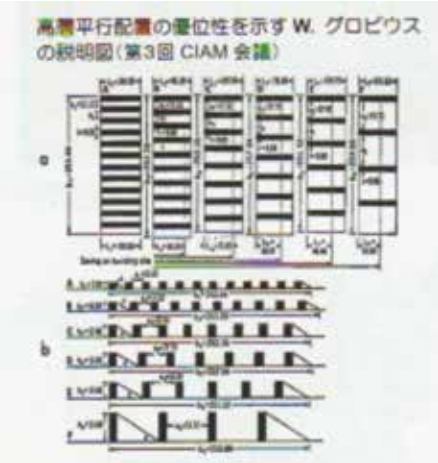
「都会―閉ざされた無限。決して迷うことのない迷路。すべての区画に、そっくり同じ番号がふられた、君だけの地図。だから君は、道を失っても、迷うことはできないのだ。」安部公房の「燃えつきた地図」が出版されたのは1980年だが、その頃、わが国は実に多くの「団地」が建設されつつあった。首都圏に限ってみても、50から100箇所近くにのぼる県もある。いうまでもなくこの配置形態は、戦前の西欧のモダニズム運動から多くの示唆を受けてきた。1930にドイツのバウハウスに留学し、W・グロピウスやB・タウトに接していた蔵田周忠の「住棟配置の発展段階図」の概念図をみてみると面白い。旧来の内庭型の街区を分節して囲い型を造るのだが、そのあと、道路に面した妻側を解放した並行配置にして、最後はこれを南北軸に開放させているのだ。



○蔵田周忠が用いた住棟配置の段階図（「集合住宅」：松葉一清より）

先の＜景観故記-2＞で私は街区型建築についての彼我の違いについて触れたが、このモデルに従えば、西欧のまちこそ「グロ：ニッポン型」つまり開放型を志向していたことになる。

50年代に始まる「団地」の配置はこのモダニズムで提唱された並行解放型の配置を追い風にしてきたことに間違いはない。それにしても42万戸が不足しているとされた当時のわが国の団地の建設はすざましい。彼我の違いを私の手元にあるベルリンの市街地図（1966）などでみてみても、並行配置型の団地はジーメンスタッドやブリッツのほかは2、3箇所しか見当たらないのだ。



○並行配置の優位性を示すグロピウスの説明図（「近代ニュータウンの系譜」：佐藤建正より）

わが国のRC造の集住体は、長崎の端島に残る三菱の炭鉱住宅が1916年にできているが、既存市街地での成果は震災後の同潤会による一連のアパートだろう。そのいくつかは街区を囲う配置形態を持つものであった。が、同潤会が戦時下に公社になり高輪のアパートなどを供給した後、55年に設立された住宅公団の建設する団地は、東西に軸を持つ短冊型の均質な並行配置で、端部を閉じて棟番号をつけていた。

住戸の内部は、ステンレスの流し台を持ち、食寝分離（京大：西山教授の提言）で51Cなる間取りタイプ（東大：吉武研究室）などが有名であるが、住棟の配置に関する研究はほとんどなく、「片廊下型」か「階段室型」かの違い程度であった。その初期には景観に変化を持たせる意図から市浦健の開発した、「スターハウス」なども配置されたが、壁率が多くなるという理由から消えていく。つまり大多数の団地は南面あるいは45°の傾斜までは許容された短冊の並ぶ並行配置で、高度成長期（あるいはその後も）に爆発的に建設されたものだ。

この過程で「配置に関する議論」はなかったのか？と、しつこく迫ってみると、実はこの議論は60年頃に始まった「千里ニュータウン」にあったのだ。住宅公団と大阪府企業局との間での議論である。「南北軸に向けた住棟配置がなぜダメか」という（大阪企業局）に対して「東西軸が第一」（住宅公団）の主張である。散々激論を交わした結果、「南北でもいいが、西向きだけは避けるように。」で議論が落着している。この大阪府側の「南北軸の配置はなぜだめか」の主張の背景には49年から61年の市街地改造法に至る間に全国で展開された「耐火建築促進法」による既存市街地の建て替え事業にあったのではあるまいか？この事業は沼津、静岡、横浜などの中心市街地にその遺構をみるが、当時、横浜市や大阪市などでは多くの技術者がこの制度で既存市街地の再生を図ろうとしていたのだ。で、「千里ニュータウン」に活動の場を移動していたのが当の彼らだったのだから「ニュータウンとは新しく市街地をつくることではないか」という思いがあったが故に、この議論が発生したのだろう。

つまり東西軸の短冊だけで街をつくることには違和感があったのではあるまいか？というのが私の推測である。

住宅公団はその後「南北から45度以内で並行配置とすること。」といった規定を設けて次々に「短冊型の団地」を建設した。並行に配置した棟ごとの隔離には「マント空間」と呼ぶ余裕が必要である。といった議論も公団内にはあったらしい。おさまらないのが大阪府企業局。で、彼らが最初に供給した「佐竹台」の配置では、一部が南北軸を持つような配置（正確ではないが）で実現した。なお、この千里ニュータウンは市浦ハウジングの富安秀雄氏（s29東大卒：当NTに在住。）が長年携さわっていたから、この配置に関する議論を問うてみたことあるが、その時氏は北欧に留学中であったという。

千里NTのマスタープランのできたのは60年。「佐竹台」の入居は62年だ。公団当初の設計課長は本城和彦（氏はその後、東大の都市工学科の教授であったから、私もお世話になった先生である。）私はそれから3、4年ほど経って隣接する「大阪博覧会」の会場予定地を、ヘリコプターで空

（次頁へ続く）

から拝見しているが、「千里ニュータウン」はすでに多くの住棟が完成していて、「センター地区」と呼ばれるゾーンをお隣の高山研究室の皆さんが検討していたように記憶している。

それから20年ほど経って高度成長期の終わる頃、都心回帰の掛け声のもと「大川端のリバーシティ21」の企画を当の住宅公団（UR都市機構）と議論している頃、千葉県企業庁から臨海部に敷地をもつ新都心住宅の事業化についてのオファーがあって、私どもは「都市デザインガイドライン」（1991千葉県企業庁）なるものを作成した。こちらは「住宅で都市はできるか」がテーマで、並行型配置を真っ向から否定した「沿道：街区型」の住宅地である。以来私は多くの調整者の皆さんの先導役を果たしてきた。南端のベイフロントと呼称する街区が完成したのは2015年とあるから、なんとこの調整に25・6年を要したことになる。今では全9400戸、25000人の住む街になっている。

考えてみれば、「南面信仰」を払拭するのに半世紀、同潤会の「江戸川アパート」（1934）から数えれば70数年が経過していたことになる。度々名称を変更した住宅公団は、阪神：淡路や東日本災害の基盤整備などで活躍してきたが、今は「UR賃貸」として77万戸もの住宅を保有する全国一の大家さんでテレビにも出てくる。ついでながら言えば、かつて住宅公団の配置モデルの一つといわれていた「赤羽台の団地」の建て替えには、なんと私たちの主張してきた沿道：囲い型の街区が数街区配置されているではないか。

この点を指摘しているのは、松葉一清の書いた「集合住宅」（2017：ちくま新書）にしかないのだ。

○幕張新都心住宅（ベイタウン）のガイドライン

身近な景観をつくる

サインデザイン専門誌「signs」編集長　武山 良三

第8回　七尾の暖簾：女将さん達が発案した花嫁のれんの展示

花嫁のれんは、江戸時代に加賀藩の領地であった能登、加賀、越中で用いられた婚礼道具のひとつで、花嫁の実家の家紋と、鶴亀や宝船などの吉兆模様を染めた加賀友禅でつくられる。花嫁が嫁ぎ先の玄関で、杯に両家の水を半分ずつ入れて飲み干す「水合わせの儀」を経て、はじめて仏間に入るときにこの花嫁のれんをくぐる。先祖に婚家の一員になったことを報告する大切な儀式を演出するのれんだが、使われるのはこの時だけ、その後は箪笥の奥に仕舞われたままになるという。

この花嫁のれんを、みんなに見て貰おうと発案したのが、七尾市にある一本杉通りの女将さん達である。一本杉通りは、奥能登への街道筋として栄えた町で、今も明治期に立てられた立派な商家が残る。しかし、1960年代以降は大型店の進出やバイパス道の整備により、通りを訪れる人は減少していた。

2004年3月、寂しくなった通りに少しでも賑わいが戻ればと、5人の女将さん達が花嫁のれんを展示することを思い立った。主旨に賛同した住民から56枚もの花嫁のれんが集まり、その年のゴールデンウィークに合わせて、38軒の商家・民家に展示した。どれ1枚として同じものがなく、加賀友禅としての美しさ、豪華さが評判を呼んだ。2009年からは空き倉庫を改造して常設展示を始め、2015年にはJR西日本が特別電車『花嫁のれん』を運行開始、2016年には婚礼儀式に使われる仏間を再現した立派な『花嫁のれん館』がつくられた。トントン拍子の発展に、一番驚いたのは発案した女将さん達だろう。

まちの区画を整理し、建物などを配置することでつくる景観は、都市計画家や建築家、あるいは行政の土木や都市整備の担当者が担う。しかし、それら都市のハードが整備され、暮らしの営みが始まると、主役は専門家から住民へ移行する。特にハードが古くなり、高齢化や人口減少が進行した地域では尚更住民によるソフトに関する取り組みが重要になってくる。古いまちだからこそ地域の文化を見直し、その活用を考えたい。女将さん達の取り組みは、肩から力が抜けた軽やかさがあり、そのことが旦那衆からの支援にも繋がったと思われる。

まちづくりに関する地域の会合や景観審議会等の委員の多くは男性で占められている。景観まちづくりの主軸がハードからソフトへ移行している今日、多様な住民が係われる体制をつくっていくことが求められる。女将さん達の取り組みは、停滞する現状を打開する上でダイバーシティが欠かせないことを確認させてくれる。

明治期に建てられた鳥居醤油店と一本杉通りの町並み。花嫁のれんの展示があることを示す提灯が掛けられている。

内部で展示されている花嫁のれん。加賀友禅で染められた吉兆模様が鮮やかだ。

ホワイトボード

景観文化でこれまで屋外広告物の景観上の課題について特集していて、今回はデジタルサイネージを取り上げた。まちにふさわしいコンテンツとはどのようなものかデジタルサイネージを含めた屋外広告物について今後も専門家との議論を紙面で紹介していきたい。

日韓デザイン交流会は、今回で10回目の開催となった。今後も引き続き開催していき、一層交流が深まることで、お互いの公共デザインの発展に貢献できればと思っている。

TDA
TDA JAPAN
NPO法人 景観デザイン支援機構　事務局
〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6　金井ビル 3F（ユー・プラネット内）
Tel：03-3847-3555　Fax：03-3847-3375　E-mail：main@tda-j.or.jp
http://www.tda-j.or.jp　https://www.facebook.com/tda.public

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
㈱昌平不動産総合研究所／日軽エンジニアリング㈱
都市環境デザイン会議／㈱都市環境研究所

コア編集委員：矢内 匠／金子 祐介／倉澤 聡　編集委員：中野 竜／オム・ジヨン／吉野 優芽／並河 みき　編集相談役：曽根 幸一／井上 洋司

ＤＴＰ：㈱アーバンプランニングネットワーク　2023091000